



早生・高糖度で果実が硬いイチゴ新品種 「堅しろう」^{けん}

暖地畑作物野菜研究領域
藤田 敏郎（ふじた としろう）

研究の背景と育成の経緯

冬から春にかけて出荷されるイチゴ促成栽培では、近年の夏秋期の高温化によって、育苗中の花芽の分化が遅れ、クリスマスシーズンを含む年内出荷が不安定となっています。その対策として早生品種の導入が効果的ですが、生産現場では早生性に加えて、食味や輸送に耐える果実の硬さなど優れた果実品質も必要とされます。そこで、九州研では、2016年度から複数の県と共同育種を開始し、早生で果実品質が優れるイチゴ新品種の育成を目指しました。

「堅しろう」は、早生品種「かおり野」と多収品種「章姫」を交配した育成中の系統を父に、果実品質に優れる鳥取県育成品種「とっておき」を母とした人工交配を2016年に行い、複数の地域にある研究機関での共同選抜を経て有望系統として選ばれました。

新品種「堅しろう」の特徴

「堅しろう」は早生で、九州地域の一般品種「さがほのか」より開花始めが7日早く、収穫始めは9日早い11月27日前後で、夏秋期が高温であっても年内の安定出荷が可能です。4月までの栽培期間を通じた収量は「さがほのか」と同程度になります。

「堅しろう」は甘い品種で、果実の糖度が「さがほのか」や「かおり野」と比べて高いです。また、「さがほのか」や「かおり野」より果実が硬く、日持ち性に優れ、長距離輸送が可能です。

品種名の由来と今後の普及の見込み

特徴である果実の硬さを表す「堅（けん）」と4つの共同育成機関にちなんだ「し（4）」を組み合わせて「堅しろう」と命名し、2024年に品種登録出願しました。地域の公設農業試験場と共同で育成された品種ですが、利用許諾先や国内栽培地域の制限はありません。複数の地域で選抜されたため、暖地～温暖地での広域的な普及が期待され、2024年秋から鳥取県内において栽培が始まりました。将来的には中国・九州地域を中心に30haの普及を目指しています。今後も、将来の気候変動に適応できるよう、高品質な早生新品種の育成を進めていく予定です。



▲図 「堅しろう」の果実

▼表 育成地での普通促成栽培における特性(2019-2021年の平均)

品種名	頂果房 開花日 (月/日)	頂果房収穫 開始日 (月/日)	商品果 全期収量 ^{a)} (kg/a)	標準比 ^{b)}	商品果 1果重 (g)	糖度 ^{c)} (° Brix)	標準比 ^{b)}	硬度 ^{c)} (N)	日持ち性 ^{d)}
堅しろう	10/27	11/27	431	102	17.3	10.6	108	2.8	良
かおり野	10/21	11/19	635	150	17.7	10.1	103	2.1	ヤ劣
さがほのか	11/3	12/6	423	100	15.8	9.8	100	2.0	中

^{a)}4月末までの収量、栽植密度は790株/a。^{b)}標準品種「さがほのか」。

^{c)}果実の糖度、硬度は11～4月に毎月1回、完全着色果2～3個ずつ調査した平均値。硬度:N/3mmφ。

^{d)}収穫後、12℃保存4日後の果実の傷み、光沢消失等からみた達観調査。